

## 第23回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ⑦

### 「日本と韓国に今でもつながるライン」

鈴木 薫

慶應義塾志木高等学校 2年



最初にいうが、寝られないというのは嘘じゃなかった。しかし決して辛いだけではなかった。最高に楽しい。充足して幸せな六日間を過ごすことができた。

南三陸ホテル観洋につき、同室の日本人学生と話して待っていると部屋のドアがノックされて韓国人学生が入ってきた。彼らは三人。そのうちの一人のジュヒョンは日本語を一年間勉強したので、日本語を少し話せるという。

しかしこのときのジュヒョンの言葉を僕は決して許さない。ジュヒョンは日本語が少ししゃべれるなんてものじゃなく、ペラペラだった。今だから言うがジュヒョンがもっと早く日本語でコミュニケーションをとることにチャレンジしていれば僕らのチームはもっと仲良くなっただろう。とは言っても僕らのチームは全チームの中で一番うるさいくらいに仲が良かったが。

言葉の壁というのは思った以上に大きい

ものだった。スマートフォンの翻訳機能を使ったり、ジュヒョンと話するときには主に日本語だったが、時には英語を使ったりしてコミュニケーションをとった。

韓国人女子学生のユビンも同じチームだった。ユビンと僕は事業案の発表者という役目を任されたので二人で朝まで発表をどうするかを話し合った。その夜は少し辛かった。時間はいくらあっても足りなかった。同じ言語を話せるもの同士で話し合えば、きっと早く話し合い、準備は終わっただろう。しかし、その苦労して練り上げ完成したものは二つの異なる文化からの視点から構成されたものであったという意味で時間には代えられない価値を帯びていたと思う。

発表のために僕らは必死に準備をしたが発表は満足いくものでは終わらせられなかった。数時間もかけて撮影し、チームメイトのシントロウが編集してくれた動画を僕の手際が悪いのと発表リハーサルが足りなかったことで再生できなかったからだ。

発表は手探りで行った。日本語と韓国語を交互に話すのだが、韓国語はまるで理解できないので、どこまでしゃべったかユビンとお互いを信じるしかなかった。

僕らのチームでコミュニケーションがうまくいったのは十人のうち五人ほぼ障害なく二カ国語をしゃべることができたことにあったと思う。ちなみにぼくはしゃべれない(´ ; ω ; `)ウゥ 言語を通じたコミュニケーションが困難であるとき人と人をつなぐのはなんだろうか。そのことをこれからも考えていきたい。相手が何を言っているかわからなくても残りの五人みんなが笑顔になれることもしばしばあった。音楽だろうか、リズムゲームだろうか、体を張ったギャグだろうか。答えは無数にあるだろうが、言語の壁がある中でみんなそろって笑ったとき、悲しんだとき、壁があるからこそ心が本当に通じあったような気がして嬉しくなった。今後お互いにお互いの言葉をしゃべれるようになるにしたがってこんな気持ちを経験することは少なくなっていくだろうが、あの新鮮な感覚を大事にしていこうと思う。

向こうの学生とは日本に帰ってから毎日のように連絡している。グループラインからも通知がやまない。ジュヒョンとは何度か電話をして韓国語を教えてもらった。

半年後にはみんなで日本に来るらしい。本当にいまから楽しみだ。僕も来年か再来年には韓国に旅行に行ってみたいと思う。再来月には日本人のチームメイトで集まってUSJに行く約束もした。京都にはチームメイトのアミがすんでいるので会いに行くのも兼ねている。

感想がキャンプの杵をはみ出してしまったが、キャンプを超えて得られたものもすべて含めて伝えたかったので許してほしい。とことで、僕らが作った事業案は価値があると言ったが、そうはいつでも口頭で簡単にコミュニケーションが取れるというのはやはり楽である。ユビンは韓国語と英語のバイリンガルであり、僕は日本語と英語が少ししか話せない。ユビンはこれから日本語を勉強すると約束してくれた。僕はユビンに韓国語と英語を勉強していつか三カ国語で自在にコミュニケーションが取れる仲になろうと約束した。韓国人は頭がいい。僕はきっとジュヒョンみたいに一年で韓国語がペラペラになるのは難しいだろう。でも何年かけてでも、英語、韓国語はしゃべれるようになってやろうと思ったこの気持ちは絶対に捨てたくない。大切に最高の友達のためだからだ。

## 「キャンプを終えて」



穴澤 梨瑚  
福島南高等学校 2年

私は、小学生の頃から K-POP が大好きだった。音楽がきっかけで勉強し始めた韓国語の語学力を伸ばしたい。旅行では味わうことのできないような同年代の韓国人と交流がしたい。また今回は震災の被災地である南三陸が開催地となった為、自分も実際に経験した、復興までの経緯や東北の絆を知ってほしい。それがこのキャンプに応募した私の理由だった。

全国からの限られた応募人数の中、自分が参加出来る自信は正直あまり無かったが、参加したいという気持ちは人一倍強かったと思う。その為、合格通知の電話が下校途中に鳴り、地下歩道で叫んだことを今でも覚えている。

初日、ホテルに着いてすぐ韓国の女子メンバーと部屋で初の顔合わせをした。お互い写真を見せ合い自分のことや学校の紹介をした。私は今まで勉強してきた韓国語を絞り出して紹介をした。頷いてくれたり自分の韓国語が伝わったときはとても嬉しかった。その後、キャンプ参加メンバーみんな顔合わせをし、班ごとにまとまり自己紹介、チームのスローガン作りなどをした。

流石に自分も含め初日は皆緊張が取れず夕食がとても静かだった。

二日目、朝食を取りホテル観洋さんの語り部バスに乗り津波で流された被災地を見学した。私の住んでいる福島市も大きな地震の被害を受けたが津波の被害は無かった。南三陸に訪れたのは私自身も初めてだった。震災から5年が過ぎたが、テレビで嫌というほど見た南三陸の町並みはとても静かだった。

その後は養殖体験と経済体験として台湾人の方々の出店の手伝いをした。三カ国の学生と一緒に経済活動をする機会は貴重だし、班のメンバーとも話が出来て、良い経験になった。夜には、私が楽しみにしていた一つのゴールデンベルが行われた。班以外の人と話す機会が少なかったので、緊張したがお互いの言語を使い、会話もしながら楽しむ事が出来た。

三日目、この日は一日中、事業発表準備だった。ここで私は韓国の学生たちの発言力と仕事の速さに驚いた。全ての人とは言えないが、日本人は自分の意見をはっきり

言えない場合や相手に合わせてしまう場合がよくある。実際自分もそのような所が少なくない。しかし、韓国の学生は時にはぶつかり合いながらも自分の意見を熱く伝える姿を見て、私は本当に感動した。またパワーポイントの作業も申し訳ないほどてきぱきと進めてくれた。

四日目、事業発表会。みんなで徹夜しながら準備した企画。私たちの発表は一番だったのでみんなが集中して聞いてくれて、とても緊張した。結果はチームワーク賞を戴けた。最優秀賞を取ることは出来なかったが、私たちのチームの仲の良さが証明されたようで私は嬉しかった。

五日目、この日は松島と仙台の観光をした。みんなで遊覧船に乗ったりプリクラを撮ったりショッピングをしたり高校生らしいとても楽しい一日だった。ホテルに帰っての「友達に一言」でもらったみんなからの直筆メッセージは宝物になり、今でも読

み返しては、みんなのことを思い出している。この日はみんなで過ごせる最後の夜だったので部屋に集まり、寝そうな人を叩き起こしながらたくさん話して、トランプをやってみんなでオールした。自動販売機のエナジードリンクを売り切れにさせたこと、夜が明けるに連れテンションが崩壊したことは一生忘れない。

六日目の別れの日、私は普段人の前では泣かないのだが自分でも驚く程涙が止まらなかった。たった五日間過ごただけなのに。このキャンプは、私が生きてきた中で最も時間の流れが速く感じられ、充実し、忘れられない六日間になっただろう。また以前よりももっと韓国を好きになったし、自分で韓国語を勉強してきたことが多くの韓国人と交流に繋がったと感じた。

改めてチーム5のみんな、メンターさん、スタッフの皆さん素敵な思い出をありがとうございました。また必ず会いましょう。

## 「TEAM ∞」



白戸 岳

慶應義塾志木高等学校 2年

七夕祭りの吹き流しが風にたなびき空高くに薄い雲が輝く七月の終わり、鋭い日差

しを浴びながら僕を待つ仙台駅が新幹線の窓から見えた。五年ぶりだ。振り返るとあ

っという間に時は流れ、気づけば高校生の自分がある。次来るのはいつだろう。少しばかりの感傷に浸りながら僕はプラットホームへと降りた。これから始まる出来事へ胸を高鳴らせながら、これからの六日間に最高の友達と出会う事など知る由も無く。

今改めて考えると僕たちがこのキャンプで得たものとは一体何でしょう。未来を見据えて練り上げた事業計画でしょうか、少しばかりの力添えができた南三陸町の復興でしょうか。もしくは暗雲の立ち込める現在の日本と韓国の相互理解でしょうか。いずれもそうかもしれませんが、ただ一つだけ僕には確かに言えることがあります。僕には友達ができました。

部屋を開けるとそこは絵に描いたようなオーシャンビューだった。ただ僕たちにそれを楽しむ余裕はない、韓国の学生が来るのはいつだいつだと言い合いながらとりあえずもらった大量の水を飲んで気を紛らわせる。ガチャ、ドアが開く。「マ、マンナソ パンガップスムニダ!」、向こうからは微妙な反応。親友との初対面ほどおかしな思い出はない。でもさすがは男子高校生、ほんの数分のババ抜きで打ち解けられた。対して、夕食はひどかった。これではまるで職務質問だと思いながら隣に座った女の子と英語で会話した。しかし、ほんの六日後には彼女と日本語で話をしているのだから驚きである。

国や文化の違う人と交流するにあたって、

一番大きな障壁となるのが言語でしょう。バベルの塔が崩壊して以来、その壁を壊すためのハンマーが英語なのかもしれません。しかし僕は今回のキャンプで気づいたことがあります。それは、英語は道具でしかないということです。逆に言えば、互いの言語はそれぞれのアイデンティティであり文化なのです。確かに英語で会話することはできるかもしれませんが。しかしそれは深い意味で相手を知り、尊重することのできる相手の言語での会話とは大きく異なるものであり、仲が良くなるほど相手のことを知りたくなるのは当然です。ただ、僕が韓国人メンバーの日本語の上手さに甘えて、韓国語を話せない羞恥心を覚えるのはもう少し後になってからでした。

時計は深夜三時を回る。すでに疲労困憊のメンターさんは意識朦朧、僕たちだけで作業を進める。日本と韓国の菓子を持ち寄ってあだこうだと言いつつあの夜が忘れられない。半分寝ながら PPT を作った。でも眠気を覚ますには騒ぐのが一番だ。半ば僕たちのチームのテーマ曲にもなった TWICE の「CHEER UP」を知ったのもこのときだったかもしれない。その時僕たちはとにかく騒いで、言い争って、たまに歌って、そして夜が明けた。目下には一面の雲海が流れている。

思い返せば最初に僕がこのキャンプと出会ったのは五月中旬、学校の廊下でした。ブルーのポスターとハンゲルが目に入ってきたのを覚えています。何気ない気分で応

募文を書いていたそのとき、僕に韓国に対する複雑な思いがあったのは事実でしょう。メディアを通じて入ってくる隣国の様子は偏っています。だからこそ、このキャンプは意義のあるものでした。今まで韓国人と直接関わったことのない僕にとってこの六日間は新鮮そのものであり、またこれからの人生において重要な経験となることは間違いありません。

キャンプ初日に日本人と韓国人それぞれの性質や長所ついでの話がありました。しかし残念ながら、僕は今回そこに大きな違いを見つけることはできませんでした。僕たちはもはや日本人でも韓国人でもなく、一人の高校生であり一つのチームでした。

終わりがあるから人生は楽しいのかもしれない。そんなことを考えながら東京行きの新幹線の座席に着く。幸いにして自由席に人はいない。見上げると空はもう藍色に染まり、紅い夕日は山の向こうに沈んだ。



仙台の香りが僕を引き止める。徹夜で語り合い騒いだ昨夜、別れ際も涙はなかった。一人を除いて。僕たちのチームらしい。今なら一番仲が良い、最高のチームだと言える。でもこの六日間、僕たちは何を成し遂げただろうか。外交官ではなく社会人でもない、僕たちはただの高校生だ。僕たちにできたこととは何だろう。僕たちにだけできたこととは何だろう。僕たちだからこそできたこととは何だろう。



僕たちは未来を築いた。日本と韓国の未来を。少しだけ、でも確実に。発車のチャイムが鳴る。この新幹線はどこへ、この僕たちはこれからどこへ向かうのだろう。僕は数分もすれば夢の中だ。でもこの夢のような時間はすぐには終わらない。なにしろ僕らは「TEAM ∞」だから。

